

子どもの愛読書

—ある市立児童図書館の場合—

私たちが、図書館のひさしを借りて児童文学の創作研究会のようなものを始めたのは、もう十年余も前のことである。以来、広島市立児童図書館「子どもの家」とのご縁は続いている。まるで友人の家のように自由に入入りして、ほしだけの本を読ませてもらってきた。

もちろんこの主役は子どもたちである。彼らが目を輝かせて書棚から本を探し出す光景は、いつ見ても楽しい。いったい子どもたちは、どんな本を読んでいるのか——私は自分の目で、これをじっくり確かめてみたい、と何度か考えた。

以下は、勝手を言って図書館から借り出した四一年度館外貸し出しカードの、いくつかの集計結果である。私は図書館のことに関しては、まったくの素人である。ただ、子どもたちが喜んで読んでもれる作品を書きたい、その足がかりのようなものを、自分なりにつかみたかっただけである。

参考資料として、館報「子どもの家」(No.11966~12発刊)と部内用パンフレット「広島市児童図書館」の二冊を、館から頂戴した。

大野 允 子

(二)

広島市立児童図書館「子どもの家」は、日本ではまだ数少ない子どものための独立図書館である。

昭和二七年、在米邦人の寄金をもとに造られたもので、円型総ガラス張り、丹下健三氏の手になる建物は、市の中心地基町児童公園の一隅にキノコに似た姿を見せている。

本館面積 三二四坪。

蔵書数 二一、八九二冊(四一年度末)

職員数 六人(うち司書は一人)

対象人口 市内居住の三〜一四才の幼児、児童、生徒 八四、六九九人

館内利用 全開架式 自由閲覧

館外利用

個人貸し出し 一週間 二冊

直接来館し一定の手続きを済ませた者

市内順回の自動車文庫による者

団体貸し出し 一ヶ月 三〇冊

読書会や町内会など各種団体を対象

開館時間

平日 正午～午後五時

土・日曜日 午前一〇時～午後三時

四一年度の延開館日数 二七七日

四一年度の延来館者数 三三三、二八四人

一日に百人以上のお客があったわけで、「子どもの家」はなかなかの繁盛ぶりである。

次の表は、四一年度中の館外利用を示したもので、直接この図書館には来ないけれど図書館を利用しているお客が、ずいぶん多いというのがわかる。

表 (1)

自動車文庫による	32,280	53
個人貸し出しによる	19,658	32.5
団体 "	8,522	14.3
利用総冊数	60,480冊	100%

自動車文庫「ともはと号」による貸し出しは三年前から行なわれているが、好評である。「ともはと号」に転載される児童図書は三、五〇〇冊、成人用のほぼ半数だが、利用度はきわめて高い。目下、一ヶ月に市内四〇の定位置に駐車して、個人貸し出しのサービスが続いている。

個人貸し出しは、簡単な手続きによる登録ののち、各人に手渡されているが、四一年度の貸し出しカードによるとその利用者は三五〇人ほどである。団体貸し出しは「よい本をすすめる母の会」の母親を中心にしたものであ

る。この図書館を母胎にした集まりで、会員数は八〇〇人、四〇いくつの地域グループを作ってきわめて積極的な活動を行なっている。

その他、「児童図書を読む会」「児童文学研究会」「お話をきく会」などが図書館を背景にして動いているが、これらの会員には特別貸し出しが認められ、自由に何冊も借り出すことができる。だから利用冊数は表(1)よりかなり多いはずである。

公共図書館としての「子どもの家」は、図書館法の定めた基準、建物面積、蔵書数、職員数のどれをとってみても、ほぼ半分の状態である。四二年度の図書購入予算は一、六四四、〇〇〇円、あいにく他市の数字を知らないので比較ができないが、決して多額とはいえないだろう。不備な点はいくつもあるけれど、「子どもの家」がずいぶん役にたっていることも、卒直に認めたい。目下、この図書館は精一ぱいの活動をしているのである。

さて、「子どもの家」の紹介はこのへんで終わりにしよう。

いったい子どもたちは、どんな本を読んでいるのか——を見るのが、私の目的だった。

子どもたちは、自由に図書館へ入ってきて自由に書棚から本をとりにだして、思い思いに机にすわってそれを読む、終わるとまた書棚へ本をおいて帰って行く、いわゆる館内利用者が多いのである。しかし、彼らが何を読んだかを知る手がかりは残念ながら残っていない。自動車文庫によるものや、母の会の団体貸し出しには、大人の意見が加わるので、どうもいただけない。

そこで、私がとりあげたのは表(1)によれば全体の三分の一弱「個人貸し出しによる」ものだけである。いささか範囲がせばめられたが、あえて焦点をしばったつもりで、その中から問題を拾いあげて

みよう。

(11)

次の表は、学年別借り出し者数を示したものである。
幼稚園と小学校一年生のカード(二年の一部にも)には、保護者
によって記入されたものが多かった。子ども自身の図書選びとい
う点では、二年生後半、あるいは三年生以上くらいを対象にすべ
きだ
ろう。

表 (2)

	学年	男	女	計
小 学 校	1	8	14	22
		27	32	
	2	6	6	59
		17	29	
	3	3	5	46
		15	23	
4	6	7	38	
	28	13		
5	3	3	41	
	23	18		
6	4	4	41	
		118	129	247
中 学 校	1	12	5	17
		2		
	2	13	6	19
		2		
	3	2	0	2
		1		
		27	11	38

注 ○幼稚園、一般大人は除外

○本字は一年間を通じて借り出しを続けた者

各人の貸し出しカードに、一週間先の返却日と書名と分類番号の
三つを自分で記入し、借りたい本と引きかえにカードを係員に渡せ
ば、一人二冊の図書が借りられるしくみである。

さて表(2)に目をむけよう。

一年生に比べると二年生の人数は、三倍に近い。そのほとんどが
自分でカードに記入しているのが、筆跡ではっきりとわかる。二年
生女子の三二人がこの表では最多数だが、カードをくってみると、
図書館に近い本川小学校の二年A組の児童七人と、二年C組の五人
が目についた。家も図書館の近所、学校の帰りに同級生の仲よしで
寄って行って、本を借り出す様子が想像できる。一年生のおおかた
が保護者と来館するのに比べて、この年令の飛躍ぶりというか、き
わめて大きな成長が、二、三年生の間にあることが素人目にもわか
るのである。

数字の谷は、小学生と中学生の間、中学二年生と三年生の間にも
現われる。中学生の来館者が少ないことには、いくつかの理由が考
えられる。一つは、小学校時代からの常連以外は館名についている
「児童」にこだわるだろうということ。もちろんこの図書館の対象
人口に中学生が含まれているから、お子様ものだけが並んでいるわ
けではない。しかし、児童文学の研究書や読書会のための参考資料
のようなものと辞書類以外は、一般大人用のものを購入しないたて
まえになっている。文学全集の頭にもすべて「少年少女」や「ジュ
ニア」がくっついているから、中学生も二、三年になるとものたり
ないのであろう。幸か不幸か、広島市には一般人用の公共図書館が
二つもあって、学生でなかなかの盛況である。理由のもう一つは、
中学生は忙しいということである。これは、三年生になると来館者
がほとんど無くなるのと通じる点であろう。平日の開館は五時まで
だから、よほど図書館付近の者でなければ、帰宅して本を借りにく
ることはできないし、できたとしても気分的におっくうなことであ

表 (8)

	学年	男	女
小 学 校	1	23~70冊	11~64冊
	2	2~110	1~102
	3	2~99	3~60
	4	3~166	5~140
	5	2~91	5~79
	6	8~115	5~210
中 学 校	1	} 3~96	} 1~59
	2		
	3		

る。勉強が忙しいから読書ができない、読書などではおれない、というのを原因の一つに数えあげれば、この表に関するかきりが、勉の傾向は女子に強いといえる。四生年頃までは読書家だった女子が、五年生頃になると進学勉強のために本を読まなくなり、中学三年生では一人の借り出し者もここでは無くなるのである。中学生の男子に少数だがちゃんと読書が続ける者があるのと比べて、ちょっと考えさせられる。

もちろんこれは一般論ではない。次表を見ると、読書量の多少にはっきり個人差のあることがわかる。借り出し冊数の最低、最高数を示したものである。

小学校一年生の最低冊数が他学年より多いのは、保護者と一緒に来館するからである。子どもをつれて図書館へ来るほどだから、教育熱心な人が読書家であろう。一度来館しただけで止めるようなこ

とのなかったのを、感じさせる。また、借り出した図書にも、明らかに保護者が読むためのものが混っていた。一年生の結果に関しては、かなり割引いて見るべきであろう。

各学年の最低冊数は、カードは作ったものの興味もてなかったからか、ただ一度で止めてしまったのや、転居によって中止した例や、三四ヶ月に一度借り出していったり、夏休みだけ借りにきた、などの特殊なものだが、案外、一、二ヶ月で来館を止めてしまう者が多い。表(2)に年間を通じての来館者数を示しておいたが、二八五人中わずかに五四人だけ、五分の一弱の人数である。図書館へ半年でも通い続ける子どもは、やはり本の好きな子どもであろう。通い続けるうちに、読書の魅力にとりつかれた子どももいるだろう。ぎっしり本のつまった書棚の間に立って、誰からもとやかく言われないうで思いのままに本を手にするのできる、図書館の楽しさを知った子どももあるだろう。それらをひっくるめて五四人という数は、小さいけれど貴重な数字でもある。

最高冊数のほうは、個人的な読書欲を反映するものであろう。どの学年にも抜群の読書家がきまって何人かいるのもおもしろい。六年生女子の二一〇冊が最多数だが、彼女は貸し出しの手伝いなどもある常連で特別貸し出しを認められている一人である。一週間三、四冊のペースだが、夏休みなどは三日に四冊、読書範囲も広くて多彩である。その一部を例示してみよう。

七・二三 インカ帝国のなぞ(少年少女世界の名著)

まほうのチョーク

愛の一家

ミーチャとまほうの時計

七・二六 春の嵐・車輪の下

まえがみ太郎

汚れなき悪戯

芥川龍之介名作集

小学生の詩集・ぎんやんま

八・二 決死の脱走作戦(少年少女世界の名著)

大どろぼうホツツェンプロック

みずうみ・三色童

月ロケットの少年

八・五 美しきポリリー(マスコット文庫)

ぼくの黒うさぎシャデラック

菊の花のやくそく

アーサー王物語

八・一二 まぼろしの王国をもとめて

くり毛のパレアナ

アンの夢の家

戦うケネディ

その他「白き処女地」「野生のエルザ」「ナルニア国の物語」や「アン」のシリーズなどとあわせて、この図書館ではほとんど読まれていない日本の創作、早船ちよの「原野わがふるさと」の上下、庄野英二の「雲の中のじい」、香川茂の「パオの少年」、佐藤暁の「豆つぶほどの小さな犬」などの書名が並んでいる。女子にはまったく読まれていなかった「ゼロ戦の栄光と悲劇」も、彼女のカードには現われてくる。

こんな例はもちろん特殊だが、年間を通じて借り出した者は、た

いていカード二、三枚ぶん(一枚のカードには三〇冊記入できる)の図書を読んでいるのである。

かなり遠方なのに兄(中二)妹(小四)そろって本好きらしく、せつせと借り出していった例もあった。兄は九五冊、妹は一三八冊。ただし、中学生の兄のほうは夏休みと冬休みの間とその前後、ふつり借り出しがと切れている。もう一例だけ、やはり中学生男子のカードに、休眼中まったく来館しなかったと思えるものがあった。休みの間にまとめて勉強をする、とかんぐるのは行き過ぎだろうか。

左の表は、図書借り出し者の居住地を示したものである。所要時間は最短コースの概数である。

表(4)

町名	人数	徒歩時間	バス電車時間
基町	48人	1分~	
白島	15	8~	10~
観音	12		10~
吉島	11		15~
舟入	11	10~	5~
十日市	9	5~	
皆実	10		10~
大手	7	5~	
翠	7		10~
庚午	7		20~
市外地からの来館者が14人 海田、廿日市町など			

図書館のある基町が第一位なのは、この町が市内でも最も面積が広い町だということとあわせて、当然の結果に思える。しかし、近

くに図書館があるから来館する、というただそれだけが理由にならないことを表(4)の数字は教えてくれる。人数の多い町から一一を拾ったわけだが、乗物にのらなければ来られない遠い町からも、かなりの子どもたちがやって来るのである。自転車を使う者が多いが、バスや電車に乗って本を借りに来る子どもたちが、とにかくかなりいるのである。

学校図書館より確かにこの「子どもの家」の蔵書のほうが、豊富である。もう一つ、思いあたる理由がある。基町は別として、来館者の多い町にはたいいてい「よい本をすすめる母の会」の組織がある、ということである。子どもの読書に関心をもつ母親たちの集まりで、母親自身が良書とは何かを勉強しながら、もちまわりの当番制で図書館から図書の団体貸し出しを受け、地域グループ内の子どもたちに自由回覧をさせているのである。

母親に感化された、と言つては実もふたもないけれど、子どもを本好きにするにはまず母親が本好きでなければならぬし、身近にまず本がおいてなければならぬのである。本がそこにあつたから読んでみた、楽しかったから図書館へ来てみた、これでもいいのではないか。

しかし図書館まで来て図書の借り出しをしていく子どもたちは、一年にたった三百人ほどである。いわゆる子どもの数は、広島市の場合先述したように八万をはるかに越えている。図書館と子どもたちの関係がまだまだほんとはさやかなものだ、ということを変更して考えさせられた。

(三)

この図書館では、三冊ずつ図書を購入する複本制をとってきたが、最近は値上がりがひどく、予算の関係で五百円以上のものは三冊ずつというわけにいかない、とは係員の言である。そのせいかどうか、いつ来てもお目にかかれない図書がある。いつ見ても定位置にすわっている図書もあるけれど。

石井桃子氏は「子どもの図書館」(岩波新書)で、読まないものはほとんど書棚から追放し、手あかで汚れ破損していく愛読書は、可能なかぎり補充していく、というようなことを言っている。これは私設の家庭文庫だからできることであつて、公共図書館の場合、破損のひどいものは廃棄処分するとしても、「子どもの家」では年間一五〇冊くらいが廃棄されているが、読まれないという理由でおくらに入れるわけにはいかない。造本が粗悪なため破損した、というようなのは近頃の書物には当たらない。破損のひどいものは製本にまわすけれど、そう何度も製本し直すことはできない。子どもは愛読書ほど早く破損して、やがて消えるということになる。その補充が行き届かなければ、ほんとに子どもたちの好きなものは、書棚のつかつていない、となる。

が、これらは裏面のことであつて、子どもたちはとにかく自分の目で、書棚から読みたいものを探し出して借りていくのである。以下は、そうやって子どもたちはいったい何を讀んだか、を示す一年間の集計結果である。

表(5)は、個人のカードをもとに借り出した度数を書名ごとに拾いあげたものである。「子どもの家」の借り出しベスト一四である。

カードは子どもたちの自筆がほとんどだが、書名のあいまいなも

表 (5)

書名	借出し回数		累計
	小学生	中学生	
名探偵ホームズ・シャーロックホームズの冒険	38	4	42
ドルトル先生物語全集・岩波書店	36		36
日本の城	24	4	28
怪盗ルパン	19	9	28
そんごくう	24		24
ギリシャ神話	23	1	24
名探偵カッレくん・名探偵カッレくんとスパイ	23		23
イソップ物語	22		22
シートン動物記	22		22
アンデルセン童話	21	1	22
ゆかいなホームーくん・岩波お話の本 ・岩波少年文庫	20		20
西遊記	14	6	20
タイタニック号の最期・少年少女世界の名著	18	2	20
ピノッキオ	20		20

のや読めない字も多かった。全集の場合など書名の一部だけを抜き書きすると、判別に迷う。「少年少女世界名作全集」と「世界名作全集」が同じものなのか、別のものなのかカードの紙面からはわからないのである。「分類番号」は記入するようになってはいるが無記入のものも多いし、図書カードや現物との照合は大変なので、「少年少女二〇世紀の記録」「日本の城」のような類本のないものだけを、とりあげた。

全集ではないが、同一主人公の名を冠したものは、ひっくるめて

扱った。

「ドルトル……」「日本……」「ゆかいな……」「タイタニック……」以外は、わんざと異本があるものばかりで「シートン動物記」のどこの出版社のものが実際に借り出されたのか、カードだけではわからない。書棚を調べると「少年少女シートン動物記」「新訳シートン動物記」なども含めて、六社八種類もが並んでいた。「名探偵ホームズ」は探したけれど、一冊もお目にかかれなかった。著者名分類カードをくると「名探偵ホームズ」が八種類「シャーロックホームズの冒険」が三種類もあった。事件そのものを題名にしたホームズものを加えると、いったいどれだけになるか、表(5)の数はぐっとふえるはずである。

さて館内にはいつも係員がいるけれど、読書指導のようなものはない。だからこれらの図書は、子どもたちの自由選択によるもの、ごく自然に現われた愛読書のいくつかである。

◎探偵ものが大好き

ホームズやルパンのファンは大人にも多い。カッレくんは焼き直されて、テレビでも放映中である。一冊、ルパンものを読むとかならずおもしろさのとりこになるのだろうか、次つぎとそのシリーズを読破していく様子が、カードにもはっきり出てくる。ポプラ社の「怪盗ルパン全集」(一―一二)など、書棚に残っていたことがない。

これは中学一年生の男子の例である。

一・八 ゼロ戦の栄光と悲劇

第二次大戦とヒトラー

ぶな屋敷の怪事件

一・一七 怪盗ルパン

第二次大戦と列国

一・二〇 開戦百日の栄光

一・二四 怪盗ルパン

一・二七 かつやくする FBI

怪盗ルパン

二・三 大和の最期

ゼロ戦物語

戦史、戦記ものとルパンがごっちゃになって借り出されている。スリルとサスペンスを追う少年の姿が見えるようである。ルパンを読むのと同じような思いで、ただおもしろく戦記ものを読まれては困るのだが……。

とにかく探偵の活躍する物語は、各学年に性別なく読まれているのは驚きである。五、六年になってきゅうに読者がふえるのは(表6)複雑な推理について行けるだけの思考力が、この年令で養われるからであろう。

◎明るくて愉快なものが好き

「ドルトル……」の全集が、一年生から六年生まで全学年に読まれているのも、みごとである。岩波から出されたこの全集は、活字も大きいルビもついているけれど、かなりな大部で大人でも一氣に読めるものではない。それが小学校の一年生にも借り出されているのには、感心した。あとで知人から一年生の男の子に、読んで聞かせたらおしまいでちゃんといってきた、という話を聞いた。「子どもの図書館」の一七八頁に「ドルトル……」についてこんな言葉がのっていた。

このシリーズが出はじめ、文庫版から大型に変わり、字が大きくなり、ふりがなが多くなつたとたんに、この本の読者の年令が、ぐっと下にさがつた。いまでは、時どき、一年生も読んでいる。(略)たいていの子が、一冊を読みだすと、つきつぎに持つていて、読みおえる。

奇想天外な筋はこびが、子どもたちをひきつけるのだから。「そんごくう」「西遊記」にも共通の魅力がある。

現代作家の創作としてはたった一冊「ゆかいなホームマークン」が顔を並べ、ずばり愉快な語を楽しませてくれる。スカンクを使って強盗をつかまえたり、自動ドーナツ製造機が止まらなくなつたり——そのドーナツ製造機とホームマークンが描かれた表紙は、線も色もみごとに美しいものである。

◎外国の名作はやつぱりおもしろい

「ギリシャ神話」「イソップ物語」「アンデルセン童話」などの後へ

グリム童話

子じか物語

15少年漂流記

せむしの小馬

ピーターパン

フランダーズの犬

これらがまさにくつわを並べて続くのである。

外国の作品でも、新しいものとなるとやはり数は少ない。借り出し度数一〇を越えるのは、次のいくつかである。

トンボのお姫さま(岩波お話の本)

長くつ下のピッピ（リンドグリーン全集）

公園のメアリーポピンズ

ムーミン谷はおおさわぎ（偕成社版、世界の子どもの本）

マムフィーのふしぎな冒険（〃）

ゆかいなどろぼうたち（学研版、新しい世界の童話シリーズ）

カーチャと子わに

ポーラスと三人のどろぼう

話そのものもおもしろいけれど、本のつくりがなかなかかりっぱで、表紙の絵が心にくいまでである。つい手にとってみたくなるよううなうまい造本である。子どもの本としては成功したものであろう。

◎高学年はノンフィクションが好き

「日本の城」が第三位というのは、どうもわからない。きわものの感がある。カラー写真入りの名城物語で、借り出しはすべて男子である。テレビの時代ものなどの影響ではなからうか。第二次大戦記の読者がほとんど男子に限られている点とあわせて、名城物語の性格をうかがうことができるように思う。

五、六年生に人気のあるのは「少年少女二〇世紀の記録1〜30」

（地球は青かった・宇宙への出発 太平洋海戦史・ノルマンディー

上陸作戦など）「少年少女世界ノンフィクション1〜12」（コンチ

キ号漂流記など）「少年少女世界の名著1〜」（決死の脱走作戦

活躍するFBIなど）で、書棚に残っていることはめったにない。

◎日本の創作はおもしろくない

特に現代の作品は読まれていない。借り出し度数一〇以上は「次郎物語」「坊ちゃん」だけで、「偉人の少年時代」のような伝記ものと低学年で「つるのおんがえし」「おむすびころりん」などの民

話を読まれているだけという、さびしさである。

次の表は各学年の男女別借り出しベスト5である。「一年の勉強」「おはなし算数」などは例外として、これには保護者の意見が感じられる——子どもたちの読書がずばり楽しむためのものだ、ということが明示されているように思う。

「子どもの家」ではいわゆる学習参考書などおかないたてまえだが「英会話練習帳」「数学論理学」「数学役にたつ」のようなものも備えられていて、わずかだが借り出されている。しかし子どもたちが借り出すおおかたは文学書というものである。（蔵書の半分が十進分類による九類「文学」である）

さて左の表は表(5)に比べると書名と数字が詳細にはなったが、やはり同じような問題点を見せている。

日本の作品があまりにも読まれないということ、ため息が出るほどである。「たつの子太郎」と「星の牧場」が顔を見せているだけで、あとは「ひざくりげ」「かぐやひめ」などの再話ものと「わらしべ長者」などの民話、異色の「小さな目」だけである。表(5)とだぶらない点を、いくつかあげてみよう。

◎小学校一、二年生は男女ともに昔話や童話をよく読む。一年生では絵本ふうなものを、二年生では「たつの子太郎」のような長い物語をちゃんと読みなす。男子は冒険談が好き、女子はお姫様の童話が好き、というように性差がはっきりと現われている。これは学年とともに一層はつきりしてくる。

◎子どもの成長段階にそって適当な本を与える、などの話をよく耳にする。小学校一、二年生むき、三、四年生むき、というように

表 (6)

学年	男	借り出 し度数	女	借り出 し度数
1	1年の勉強	5	ぞうさんババール・王さまババール	6
	ドルトル先生……	5	つるの恩がえし	4
	うたのえほん	4	天からふってきたお金	4
	おはなし算数	3	おずのまほうつかい	3
	そんごくう	3	かぐやひめ	3
2	世界の昔話	7	小公子	8
	ひざくりげ	7	きつねのさいばん	8
	フランダーズの犬	6	人魚姫	8
	ねずみのかくれんぼ	6	白雪姫	8
	たつの子太郎	5	せむしの小馬	8
3	日本の城	4	青い鳥	5
	シートン動物記	4	白雪姫	5
	ピッピ南の島へ・ピッピ船にのる	4	小公女	5
	ゆかいなホームーくん	3	おむすびころりん	4
	小さな目	3	ピッピ南の島へ・ピッピ船にのる	4
4	シートン動物記	9	ポルコさまちえ話	7
	ギリシャ神話	5	ゆかいなホームーくん	5
	名探偵カッレ……	5	小さな目	4
	日本の歴史	5	小さい魔女	4
	偉人の少年時代	5	わらしべ長者	4
5	名探偵ホームズ……	10	シートン動物記	3
	日本の城	10	ゆかいなホームーくん	3
	タイタニック号の最期	9	星の牧場	3
	怪盗ルパン	6	ブー横丁にたった家	3
	シートン動物記	6	ひみつのへや	3
6	ドルトル先生……	16	名探偵ホームズ……	10
	名探偵ホームズ……	11	少年少女20世紀の記録	8
	オックスホード世界の民話	9	怪盗ルパン	5
	ゼロ戦の栄光と悲劇	5	アンの愛の家庭	5
	緑のほのおの少年団	5	アンの娘のリラ	4
中 1	次郎物語	8	女中っ子	3
	少年少女20世紀の記録	6	オリヴァ・トウィスト	3
	世界のなぞとふしぎ	7	少女レベッカ	2
	この人に学ぼう	5	せまき門	2
中 2	宮本武蔵	5	アンネの日記	2
	NHKある人生	4	山のかなたに	2
	西遊記	4	王女ナスカ	2
	次郎物語	4	怪盗ルパン	2

分けたブックリストが多い。表(6)の二年生男子と三年生のそれを比べてみると、はっきりその間に線の引けることがわかる。「シートン動物記」「日本の城」「小さな目」などは、昔話や童話とはまったく異なった世界のものである。いわゆるお話以外のものにも興味を示す年令なのである。二年生から三年生へ——彼らの世界そのものが急速にひろがって行き、興味の対象が多様になって行くことがわかる。女子の場合、この表でははっきりしないが、調べてみるとやはり発達の過程が明瞭に現われてくる。次はその一例で、二年生になったばかりの五月と三学期末、三月の借り出し図書名を、いくつか抜き出したものである。文字などカードそのままを移した。

五月 らくだのおどり

おはなしグリム

にんぎょひめ

ぐりむどうわ

ひらがなソップものがたり

三月 トンボソのおひめさま

ひみつの花ぞの

クマのプーさんプー横丁に立った家

赤げのアン

風車小屋だより

サーカスの四月ばか

三年生が近くなると、長い筋のあるお話を読みこなすのである。

「赤げのアン」「風車小屋だより」ほどの版かわからないけれど、

「おはなしグリム」などとはかなり変わった傾向のものである。すばらしい飛躍を感じる。

読書の魅力がほんとにわかってくるのは二年生の後半頃からはなからうか。読む者と読まなかった者の読書力の差がはっきりしてくるのも、この頃である。カードにも個人差が実によく現われてくる。

◎「日本の城」、これは写真が多くて見ている結構おもしろいが、これから始まったノンフィクションへの興味は、五、六年生で一層強まり、中学生では「ジュニア版NHKある人生」(岩崎書店)を読みこなすまでになる。事実の不思議さに心ひかれる——それは生きることへの積極さを示すものかもしれない。「少年少女二〇世紀の記録」は四〇年度にも、中学一年生の借り出し一位になっている。巻数は三〇巻、「黒部ダム物語・マンモスタンカー」「ゼロ戦物語」など、とにかく多種多彩な内容なのである。どれにも一種の迫力と人間臭がこもっていて、たいくつな小説よりはるかにましでもある。「ある人生」は偉人伝とは違った市井の人間記で、生きることのさまざまな姿をきまじめに見せてくれる。

◎「ゼロ戦物語」や「太平洋戦争史」は、いつも借り出されている。ここ一年ほど気をつけて見ていたが、書棚にほとんど姿を見せたことがない。いつも男子に借り出されているのである。昭和のはじめに書かれた吉屋信子の「七木椿」が今も女子に読まれているとあわせて、男女の好みの差を改めて考えさせられた。「小公女」「白雪姫」を読む男子は一人もないし、「ゼロ戦の栄光と悲劇」を読んだ女子はたった一人だった。冒険談の好きな男子は「ドルトル……」「たつの子太郎」イタリヤのバルチザン物語「緑のほのおの少年団」や悟空の「西遊記」少し変わるけれど「宮本武蔵」などに傾倒し、「白雪姫」「小公女」に始まるお姫さま好みは、「王女ナスカ」や「アンの愛の家庭」へと発展する、その系譜がまことに鮮や

かである。

男女そろって愛読するのは「ゆかいなホームーくん」「ピッピ南の島へ」などの愉快なもの、「シートン動物記」などの動物もの、ホームズやルパン登場の探偵もの、などである。「怪事件」「謎」「恐怖」が題名についていると高学年の男女はとびつき、「冒險」「愉快」がついたものには低学年男女がとびつき、子どもの図書選びには多分に題名が関係していることがわかる。

とにかく子どもたちの多くはおもしろいもの、スリルとユーモアのある図書を選んで読んだということになる。

(四)

子どもの読書は楽しみのためである。何かを意識して学びとろうとかま、えたりはしない。学校や家庭と切り離された公共図書館の中で、自由に子どもたちが本を選ぶとき、場慣れない子どもはやはり一種のこだわりをもつだろうが、——わりに自分に対して正直な図書を見つけ出すのではなからうか。ほんとに読みたいものを選び出すはずである。

大人がとやかく言わず、まず子どもたちを本のあるところへ置くことである。子どもはいつも新しいものを探している。ホームズばかり読むと歎くことはない。ほんとに本の好きな子どもなら、どんな視野を拡げて行く、いつまでも足ぶみはしていない。

中学二年生男子のカードから、一学期に借り出した図書の一部を左記しよう。童話あり小説あり記録ありスポーツあり、驚くほど多彩である。

宮本武蔵 1~5.

坊ちゃん

太平洋ひとりぼっち

中学生世界民話全集

猛獣の世界

柔道十講

人工頭脳の怪

少年少女二〇世紀の記録

中国童話集

西遊記

今昔物語

NHKある人生

生命をさぐった人々

名探偵シャーロックホームズ

神代の物語

イワンのばか

ロビンソンクルーソー

水滸伝 上、下

青い山脈

アラビアンナイト

トランジスタラジオ修理改造作り方

サイクリング百科

ふるさとの民話

子どもたちの目は実にしっかりしている、と思った。これらの引例は、いわば読書家の代表のものである。しかし、け

つして特殊な子どもではない。きつかけさえあれば、子どもはだれでもおもしろい図書を書棚から見つけ出して読むはずである。

おもしろさを分析すると、スリルやサスペンスやユーモア——が残る。目新しいものではない。しかし、日本の創作にはこれらを満たしたものが、あまりにも数少ない。大人の私が熱中して読むほどの作品は、残念ながらたいい翻訳したものである。大人がおもしろいと思うものはたいい子どもたちもおもしろがる。子どもも愛読書は調べてみると、やはり大人にも充分に読みごたえのあるものが多い。

もちろんおもしろさだけで作品の良否を決めることはできない。

子どもたちの選んだ図書だからこれが真の子どもの良書だ、など言いきるつもりはない。ただ、子どもたちの作品に対する反応のようなものを、得たかったのである。すでに自分が子どもではない、というあたり前のことが、すくなくとも児童文学の創作をやるうとする者にとっては、なかなかやっかいなことなのである。

さて表(6)のベスト5には、四〇年度にもやはり五指に入ったものが、いくつかある。たまたま今年読まれたのではない、いわば今までに何年も読まれていたもので、これからもずっと読み続けられるだろうという、ほんとの愛読書であろう。

ピッピ南の島へ

アンネの日記

シートン動物記

少年少女20世紀の記録

宮本武蔵

ギリシヤ神話

シャーロックホームズの冒険

フランダーズの犬

大半はこのまま良書目録にのせても、もんくがでないだろう。子どもの本は、より長い目で見ると、子どもによって選ばれるものということが、わかる。

子どもたちが何を讀んだか——を知って、自分の創作の足がかりをつくるつもりでこのやっかいなカード整理をやったのだが、子どもたちの讀んだ図書群を眺めながら、感じることも多々である。

男子は「ゼロ戦の栄光と悲劇」に熱中し、女子は「赤毛のアン」のシリーズを讀破する、吉屋信子の少女小説まで読むのである。彼らを熱中させる戦争文学が果たして日本にあるだろうかと考えると「開戦百日の栄光」が、ずしりと心に重い。アンに匹敵する日本の少女像が、思い出せない。

幼児や小学校低学年のためのすばらしい絵本が生まれつつあるのに比べると、少年少女小説の世界はいささかお寒い。いつまでも「次郎物語」「路傍の石」におぶさってはおれない。書店に並べられた華やかな「女学生の友」や「小説ジュニア」を見るたびに、日本の少女の渴きのようなものを、私は感じる。純愛小説オンパレードである。消耗品化したこれらの小説を軽べつするだけでは、やはりことは終わらないはずである。読者の関心にてらうのは愚としても、読者そっちのけの作品はやはり困るわけである。カード整理をしてみて、痛感したことの一つである。

児童図書館に中学生の来館者が少ない理由を多忙だからだろう、と言ったりしたけれどここまで来て私は、中学生のための図書がほ

んとは無いからだ、とつけ加えなければならなくなった。買おうにも無いわけである。大人の文学へ飛びついて行けない者は、ここでジュニア小説雑誌の読者になり、やがて週刊誌の購読者になって行くのではなからうか。

子どもは自由に選んだ——と私は何度か言った。しかし、大人の選んだ本の中から比較的思いのままに選んだ、というにすぎない。子どもの図書の作り手も買い手も、すべて大人たちである。子どもたちがほんとうに望んでいるものが、果たして十分に用意されていたか——という間にここでぶつかるのである。

(日本児童文学者協会会員)